

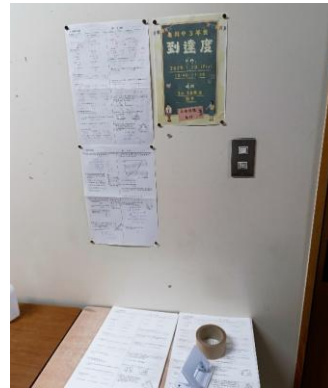
リーディングDXスクール事業【実践事例】

海南市立亀川中学校

【取組内容】「不易流行に根ざした個別最適学習と協働学習の充実」①

□ICTの活用

- ・ **個別最適な学び**: タブレットや従来からあるワークシートを活用し、生徒一人ひとりの学習進度に応じた教材を提供した。例えば、数学の授業では、生徒が自分のペースで問題を解くことができるように、デジタル教材と個々に応じたプリントを用意し、選択できるようにした。
- ・ **協働的な学び**: オンラインツールや学習支援ソフトだけでなく黒板を使って、グループでの共同作業やディスカッションを行った。例えば、社会の授業では、グループごとにテーマを決めて調査し、オンラインプレゼンテーションを行った。



□教師の役割

- ・ **個別最適な学び**: 生徒一人ひとりの学習進度や理解度を把握し、それに応じた指導を行うことに重点をおいた。例えば、理解が遅れている生徒には個別に補習を行い、進度が早い生徒には追加の課題を提供した。
- ・ **協働的な学び**: 生徒が自律的に学ぶ力を育むための支援を行った。これには、生徒が自分で目標を設定し、それに向かって計画を立てる手助けをすることが含まれる。例えば、単元の初めに生徒と一緒に目標を設定し、その進捗を定期的に確認することで、自律的な学びを促進することである。

□リーディングDXスクールの指定校として

- ・ **個別最適な学び**: デジタルツールを活用して、生徒一人ひとりの学習ニーズに応じた指導を行った。
- ・ **協働的な学び**: デジタルツールを使った共同作業やプロジェクトベースの学習を推進した。例えば、生成AIを活用したプロジェクトで、生徒たちが共同でアイデアを出し合い、問題解決に取り組む活動を行った。



リーディングDXスクール事業【実践事例】

海南市立亀川中学校

【取組内容】 「不易流行に根ざした個別最適学習と協働学習の充実」 ②

□ノート学習とタブレット活用のハイブリッド

・ **個別最適な学び**: タブレットとの併用で、生徒が自分のペースでノートに学習内容を書き込み、理解を深めた。例えば、授業中に教師が説明した内容を自分なりにまとめたり、問題を解いたりした。そのため、タブレットとワークシート・ノートを自由に選択できる学習環境を用意した。

・ **協働的な学び**: ノートやタブレットに書いた内容を基に、学級全体でディスカッションを行った。生徒同士で意見交換をしながら、各自の理解を深め合った。



□生徒会の取組と学校討論

・ **個別最適な学び**: 生徒総会の取組では、生徒一人ひとりの意見や関心を集め、それを基に議題を設定させた。例えば、アンケートを実施して生徒の関心事を把握し、その結果をもとに総会で議論するテーマを決定した。

・ **協働的な学び**: タブレットを使って、生徒が自分の意見をリアルタイムで共有できる環境を整えた。これにより、全員が平等に意見を発表でき、今までより、議論が活発になったと思われる。



□手書きのポートフォリオ作成と発表

・ **個別最適な学び**: 生徒が自分の学習成果を手書きでポートフォリオにまとめた。例えば、学期ごとの目標や達成した内容を記録した。「考えて書く」ということを重要視したからである。

・ **協働的な学び**: ポートフォリオをクラスで発表し、他の生徒からのフィードバックを受けた。これにより、自己評価と他者評価を通じて学びを深めた。



リーディングDXスクール事業【実践事例】

海南市立亀川中学校

【取組内容】情報活用能力育成のための包括的アプローチ①

□カリキュラムの統合

- ・ **事例:** 各教科の授業に情報リテラシーの要素を組み込んだ。例えば、国語の授業で情報の信憑性を判断する方法を学び、社会の授業でデータ分析のスキルを養うなど、教科横断的なアプローチを採用した。
- ・ **目的:** 生徒が多角的に情報を活用できるようにする。これにより、各教科で学んだ情報リテラシーのスキルを総合的に活用し、実生活での問題解決に役立てることができると考える。

□教員の研修

- ・ **事例:** 教員が最新の情報技術や情報リテラシー教育の方法を理解し、実践できるようにするための研修を定期的に行った。例えば、ワークショップ形式での研修や、外部講師を招いた現職教育を開催した。これにより、教員が生徒に対して適切な指導を行うことができると考える。
- ・ **目的:** 教員の指導力を向上させる。教員が情報リテラシーの重要性を理解し、自らの授業に取り入れることで、生徒の学習効果を高める。



□学力向上

- ・ **事例:** 情報活用能力を育成する視点を取り入れることで、学力向上を図った。例えば、情報収集や分析のスキルを活用して、各教科の学習内容を深めるプロジェクトを実施した。数学の授業では、統計データを用いた問題解決を行い、理科の授業では、実験データの収集と分析を通じて科学的な探究を深めた。技術科の授業では、情報技術を活用したプロジェクトを通じて、プログラミングやデータ管理のスキルを身につけることをねらいとした。



目的: 情報活用能力の育成を通じて、各教科の学力を向上させる。生徒が情報を効果的に活用することで、学習内容の理解が深まり、学力向上に繋がるのではないかと考える。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

海南市立亀川中学校

【取組内容】情報活用能力育成のための包括的アプローチ②

□情報モラル教育

・ **事例**: 情報モラルに関する授業を定期的に行い、生徒にインターネット上での適切な行動やプライバシー保護、著作権の尊重について学ぶ機会を提供した。例えば、SNSの利用方法やネット上でのトラブル回避方法、弁護士発信による事例紹介等である。

・ **目的**: 生徒が安全かつ倫理的に情報を活用できるようにする。情報モラル教育を通じて、生徒はインターネット上での適切な行動を身につけ、トラブルを未然に防ぐ力を養う。



□生成AIの活用と理解

・ **事例**: 生成AI（例えば、文章生成AIや画像生成AI）の活用方法を授業に取り入れた。生徒が生成AIを使って情報を収集・分析する方法を学び、その限界や倫理的な問題についても理解を深めた。

・ **目的**: 生徒が最新の技術を理解し、適切に活用できるようにする。生成AIの活用を通じて、生徒は新しい技術の可能性と課題を理解し将来の情報社会での適応力を高める。

□評価とフィードバック

・ **事例**: 生徒の情報活用能力を評価し、適切なフィードバックを行った。評価の際には、情報の収集方法、分析の正確さ、発信の効果性などを総合的に判断した。例えば、プロジェクトの成果物やプレゼンテーションを評価し、具体的な改善点をフィードバックし系統的な指導を行った。

・ **目的**: 学習の進捗を確認し、さらなる成長を促す。評価とフィードバックを通じて、生徒は自らの情報活用スキルを客観的に見直し、次のステップに進むための具体的な指針を得ることができると考える。

リーディングDXスクール事業【実践事例】

海南市立亀川中学校

【取組内容】 伝統との調和をふまえた校務DXの実践

□背景と目的

一般的に、学校における校務DXは、業務の効率化と情報共有の迅速化を目指している。しかし、本校では、ICTに過度に依存することなく、伝統的な方法も大切にしながら進めることが重要であると考えた。以下に幾つかの視点を示す。

□職員朝礼の全員参加

職員朝礼は、全員が参加することとしている。直接顔を合わせてコミュニケーションを図ることで、情報の伝達・意思疎通がスムーズに行われるからである。

□ホワイトボードを活用した情報共有

連絡事項はクラウド等にアップするのではなく、ホワイトボードを使って共有している。そうすることで、全員が一目で確認でき、見落としを防ぐことができる。そして、職員が必要に応じて書き込んだりもする。また、一日の終わりにホワイトボードを撮影し、クラウド上にデータとして蓄積している。これが、次年度の学校運営に役立つと思われる。

□口頭での報告

生徒指導などの重要な内容は、必ず、職員朝礼で担当者が口頭で報告するようにしている。これにより、その時の状況やニュアンスが伝わりやすくなり、適切な対応が可能となる。

□不易流行の精神

校務DXを進めるにあたり、伝統的な方法と新しい技術のバランスを大切にした。効率化を図りつつも、直接的なコミュニケーションや従来の方法を尊重することで、より良い教育環境を目指している。

